

(別紙様式)

金沢市立明成小学校

【はじめに】

本校は、金沢駅近くに位置し、平成7年4月に旧瓢箪町小学校と旧此花町小学校が統合して開校した。全校児童は241名、教職員は24名である。

学校の北側には浅野川が流れ、南側には安江八幡宮や東別院など由緒ある大きな境内をもつ寺社も数多く見られる。そのため、四季を通じて子ども達が自然を目にする事が出来る。また、西側にはふらっと通りや安江町商店街など歴史と伝統を重んじながらも新しい感覚も取り入れた店舗が軒を連ね、地域の方々には郷土愛に満ちている。

昨年度、ユネスコスクールの認定を受け、環境や文化、国際理解を主要テーマとして持続発展教育の実践に取り組んでいる。

たくさんの絆をつなごう！

1 ユネスコスクールとしての取組

・3年生「食べ物探検隊！」

金沢学びタイムで、金沢は茶道が盛んであり、和菓子が有名なことを学んだ。お茶室でお抹茶と和菓子を味わう体験をし、金沢の文化を肌で感じながら知ることができた。

社会科の「工場の仕事」の学習では、校区の和菓子屋さんについて調べた。実際に学校に来ていただき、練り切り作りを披露して頂いた。季節を楽しむ心や職人の方の繊細な技に驚きながら和菓子の作り方を感ずることができた。その後一人一人が実際に和菓子作りを体験し、職人さんのように手早く、同じ大きさ形にすることはとても難しかったがそれぞれ個性あふれる練り切りを作り上げることができた。

その体験活動の後、学んだこと、感じたことを新聞にまとめ、他の学年にも広めることができた。

これらの活動から子どもたちは和菓子をより身近な物としてとらえることができたとともに金沢のよさにも気づくことができていた。



・4年生「ネイチャー エコクラフ」

4年生は、グリーンカーテンの栽培を行った。グリーンカーテンは、アサガオとヒョウタンを栽培した。5月下旬、校舎横のプランターの土を耕し、施肥を行った。その後、6月上旬に種まきを行った。発芽後は、子どもたちが当番となり、水やりや草抜きを毎日続けた。発芽したヒョウタンに一株ひと株名前をつけて愛着を持って世話をした。夏休み中も当番を組み、朝・昼・夕の1日3回、水やりや草抜きを続けた。土曜日と日曜日は、子どもたちも当番があたっているが、地域のボランティア（グリーンボランティアと呼称）の方と一緒に、栽培を続けた。あつい夏であったが、アサガオとヒョウタンの葉が茂り、グリーンカーテンを設置した1階理科室横



と玄関には影ができ、効果が見られた。ヒョウタンはいくつかの実をつけ、ヒョウタンの実の収穫を秋～冬に行った。理科の学習と関連させて、ヒョウタンの様子を観察し、一人一人がその成長の様子を見守ることができた。



・5年生「ひろげようボランティアの輪を～39FRIENDS～」

ムンバ・ワトソン君。彼の国は最貧国の一つといわれているアフリカのマラウイに住む11歳の少年。1年間、彼を39人目のクラスメートとして、毎月4500円の支援金を送る里親支援のボランティアをすることにした。(事実上は担任が個人的に始めたボランティアを今年度一年間は子どもたちも応援するという形ですすめた。)

マラウイのワトソン君と英語で手紙をやりとりした。英語の辞書を活用して読み取ったり、英語の得意な家族や知り合いの力も借りて手紙を書いたりした。また、どんな環境で暮らしているのかを調べた時には、社会科の「日本の食料生産」で学んだことと結びつけて、「自分たちがいかにぜいたくに食べ物を選んできているか」ということに気付き、見つめ直すことができた。

自分たちの活動について家族に理解してもらい様々な面で協力を得ることもできた。一番大きな協力を得られたのは、親子で手作りマスクと雑巾を作りその一部をバザーで販売したことだ。当日はお客さんに「マラウイの人々の生活の様子」やそれが「日本のライフスタイルとも無関係ではないこと」、また、「売り上げた代金は全てワトソン君の住むコミュニティの自立支援に活かされること」などを訴えた。その結果、用意した全ての商品が完売。売上代金に加え善意のこもる募金も寄せられ約2万円ものお金を集めることができた。

この活動を通して、同じ地球で辛い環境で生きなければならない同世代の子が存在していることを知ることができた。同時に、その環境が自分たちの生活のあり方とも結びついていて、決して他人事ではないことに気付くこともできた。小さな支援ではあったかもしれないが、これからの地球市民としての生き方に少しでも結びついていってほしいと願っている。

・6年生「夢に向かって」

NPO法人テラ・ルネッサンス代表の鬼丸さんに来校頂きお話を伺った。鬼丸さんは大学時代からアフリカの少年兵の問題や世界の地雷問題の解決に取り組み初め、NPOを立ち上げ現在まで活動を続けている方である。子ども兵の悲惨な状況が先進国の生活と密接に結びついていることを実際の体験を通して熱く語って下さった。しかし常に、途方もなく大きな問題に対しできることは小さく「自分のやっていることに意味があるのだろうか？」と自問自答しながらここまで突き進んでこられたという心の内も語って下さった。子どもたちは、自分たちの生活の仕方につながるたくさんの存在を知る大切さを感じていた。また、強い思いを持って行動する人の力強さに惹きつけられていた。自分の生きる意味を見つめ直す機会とすることができる出会いとなった。



2 成果と課題

各学年とも総合的な学習の時間を中心として、各教科での学びにつなげたり、広めたりしながら活動をすすめていった。どの学年でも、人と人のつながりを通して、直接に体験し、その息づかいを感じながら学びを積み重ねることができた。

今後の課題として、他教科との関連を図った新教材の開発や人材の発掘、時数の確保などがある。

ESD カレンダーの見直しを進めるながら、他教科との関連をより一層深め、時間の有効的な活用ができるようにしていきたいと考えている。